

往古の蹤

む
か
し

あ
し
あと

往古の蹤

作州との交流はみそぎ・志引峠・上みだら・小谷・センゴウジ峠である。

但馬へは波賀坂と鳥ヶ峠

宍粟郡の経済、文化、政治の中心である山崎へは、岩上峠・塩地峠やイチが峠をへて白口峠であつた。

郡道が明治二十二年（一八八九）に改修されて、ようやく隣往古は土地を離れるといえば、歩くよりほか方法はなかつた。足の弱い者や、病弱な者は、駕や馬によつて遠方へいつたらしいが、経済の関係から、大部分の者は草鞋ばきで歩いたものだ。

それより更に古の人間は素足で歩いたらしいが、千種に残る伝承や古文書では知るよしもない。

中国山脈が町の北側を東西に走り、その支脈が東と西を南下して、この間に囲れた盆地、それが千種町で、他郷との交通は当然坂、峠、峠を越さねばならぬ土地である。

瀬戸内海の赤穂へ流れている延長約二十里の千種川も、水源地の千種の名でよばれるそのことにも、案外千種の開化が下流よりも旺盛であり、時期が早かつたのではなかろうか。

この千種川筋も、小坂・阿踏坂・ナメツワ・河崎・漆野など

の歩危によつて交通は遮断され、廻り道するか、無理に危険な所を通らなければならぬありさまだつた。だから因幡との交流は江浪・中江・大通峠であり、

字大寺に大心寺という寺があつて、非常に大きかつたそうであるが、文献もなし、何時、何の理由で廢寺になつたかは知るよしもない。大寺という地名が現存し、土井久の田の中に礎石らしいものが点在している事実、道路改修の際に出てきた「軒先蓮花文瓦」などから想像すると大古刹の感がする。大和から出雲へ備中・美作への通行路と考えても、一応妥当な位置ではある。

葦原志挙乎命と天日槍命の国占め争いの記事などからみても、

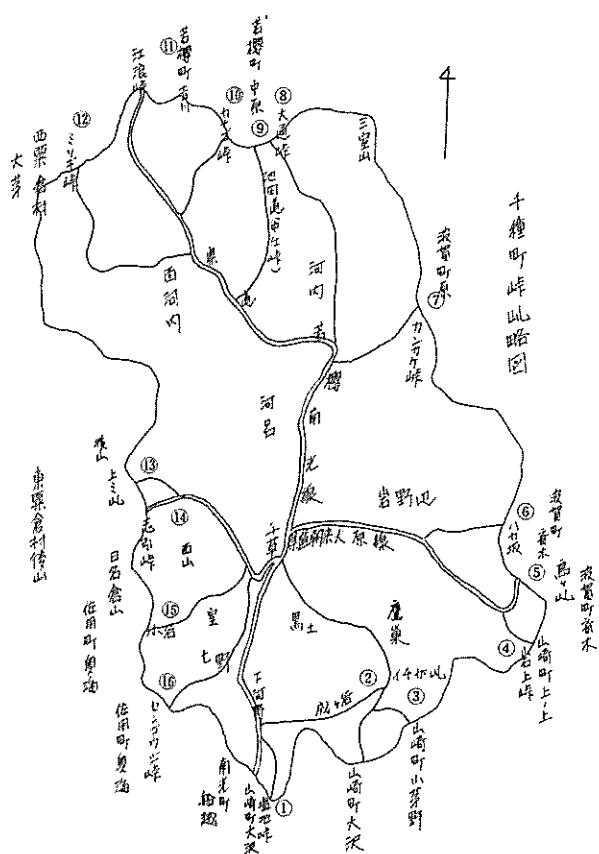
現在では、県道若桜南光線が町の中央を縦貫し、朝来大原線が横断しているし、鍋ヶ谷峠越林道が岡山県に、大通林道が鳥

取県に通じてゐるが、これらの道の改修以前は、すべて峠越えをしなければならない地理的悪条件であつた。

往古の蹤

岡中① 塩地帖

そのよきなかで、山峠への道、塩北峠は、千種の生活を支えてきた。た峠の一つであった。下河野の砂子すなこから大澤の小河内おおさわへ通ずる標高四百五十メートルのこの峠は、砂子側からはゆるい登りとなつてゐるが、小河内への下りは急で、大変な峠という印象を与える。



砂子の道標は

左やまさか

と刻まれ、江戸末期から明治・大正・昭和と、旅人の道案内をしたもののであり、頂上の地蔵堂には、石の地蔵尊が安置されて、旅人の道中安全を祈念してきたのである。千種からは鉄、炭、板などが山崎へ、山崎からは、塩、酒、油、乾物、反物などがこの峠を越して千種へと、交易ルートの最たるものになつた時代もあつた。



砂子道標



大沢道標



塩地峠

十一月二十二日 河呂行

是は大雪にて塩地峠の通行が困難なので、除雪人夫割出しの手紙持参

明和六年（一七六九）から文政十一年（一八二八）までの六十年間、尼崎の松平遠江守の領地となつた千種町全域は、御年貢米を牛馬の背につけ、山崎町の出石まで津出したのもこの峠を越してのことである。

徳川中期から鉛製鉄の経営が山崎や曾根・大阪などの資本家に占められ、粗製品のほとんどがこの峠を越し、また逆に上方の文化がはいつてきた。

安政二（一八五五）卯年岩野辺村庄屋一の坪門蔵の諸入用書

安政二（一八五五）卯年岩野辺村庄屋一の坪門蔵の諸入用書

出し帳に、

四月十七日

是は塩地峠の地蔵堂建立いたし、寄附金申込みにつき、他村なみに遣したる分

安政五（一八五八）午年東河内村庄屋彦左衛門の諸事書出し帳に、

また、

詫書一札の事

一、私達は、商人衆の御荷物宿を致しており、この荷物を出す

のに、近年他所の牛馬を多く使い、村方の牛馬追い衆が、中

附に付けておられた荷物が足らなくて困つておられるといわ

れましたが、私達はその言葉にとりあわず、他所の牛馬ばかり

使いました。それで、村の御役人様へ訴えられ、御役場へ召

しだされて、いろいろと言うて聞かされ、村の牛馬追い衆を

使わなければ、荷物宿を取り消すと申されたことは、一言の

申しわけもなく、ごもつともでござります。はなはだ当惑し

ていましたところ、西河内村の梶右衛門殿と東河内村の勘右

衛門殿の二人が御挨拶して、御詫して下さいましたので、各

様御立腹のところを御勘弁なされて、まことに有難う存じま

す。

この上は荷物受扱のことは、各様の御差図の通りに、荷物
着次第、村方の牛馬追衆の方へ通知致します。万一この後不
埒なことをして、牛馬持の方によくないやり方を致しました
ならば、そのときは荷物宿を取り消されても、一言も苦情を
申しません。

後日のため株内一同連印して差上げ申します。

文政元（一八一八）寅年六月十七日

小河内 本人 新兵衛

庄屋 儀右衛門殿

年寄 小左衛門殿

同断 忠 八 殿

右の通り詫書差出ましたところ、少しも相違御座いません。
後日のため奥書印形いたします。

寅の六月

年寄 忠 八

同断 小左衛門

荷附牛馬持御連中

前書の通り、私共二人で御詫致しました通り少しも相違なく、後日のため、次足印判致します。

寅の六月

西河内村取成人 梶右衛門
東河内村同 断 勘右衛門

株内 五郎太夫
外三人



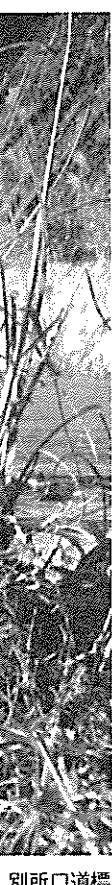
成ヶ谷

右ちくさ町
成ヶ谷

左けごの

の道標をうかがうとき、往古は相当の往来があつたことを想像する。

しかし、いまはこの峠を利用する人もなく、この道を知らない人が多い。



別所口道標

図中③ イチガ屹

イチガ屹は鷹巣から小茅野へ越す標高五百五十メートルの屹。小茅野の学童はこの屹を越して、千種中学や東小学校、幼稚園へ通っている。



別所口道標

図中② 戌ヶ谷道

戌ヶ谷は何故か坂とも峠とも屹ともいわない。下河野と鷹巣との最短距離の山道で、

下河野側の山の中には

右たかのす

左やまみち
の道標があり
鷹巣の別所口には

九日 二人 内海組頭 儀 八・龜太郎

イチガ屹

是は大坂御代官が千草町へ岩上ごしでござると、都多の上ノ村から知らせがあり岩上峠の道造。

あまり長いことおいでにならぬので、上ノ村へ聞きあわせに行つた所、急に小茅野へ変更されたときの人夫。

この頃は宍粟郡のうち四十一ヶ村は大坂の谷町代官所支配で、ちくさは十一ヶ村に仕組まれていた。

千草谷村々より道法

元文三（一七三八）午年正月御改正の写し



頂上の石の地蔵さんは、すこし道からはいつた雑木林の中で苔生している。元はこの地蔵さんの前が道であつて、その跡がかすかに認められる。

天正八年（一五八〇）長水城が羽柴秀吉の先兵、荒木平太夫に攻められて落城の際、城主宇野下総守政頼は、この道を通り千草へ落ちのびて来たことが『長水軍記』にも書かれている。

一、江戸へ百六十九里 下河野村
一、江戸へ百七十里 七野村
一、江戸へ百七十里半 室村
一、江戸へ百七十里半 黒土村
一、江戸へ百七十九里 千草村
一、江戸へ百六十九里 たかのす村

往古の蹟

安政二（一八五五）卯年、岩野辺村の庄屋一の坪門蔵の「諸入用書出し帳」に、

これからみると、鷹巣はイチガ屹、白口峠のルートで、他村は塩地峠とうかがえる。

図中④ 岩上峠

右たかのす

左つた、いわがみ道

の道標が内海に建っている。



岩上峠

岩野辺の牛追い伊之助が米を積んだ牛をひいて、山崎の庄能まで行つた時、本多藩の若侍とささいなことから口論になり、伊之助が

「天領の上納米に指一本でも触れてみろ、お前達の笠の台

がとぶぞ」

と悪口雜言を吐いたのが問題になり、本多藩から岩野辺の庄屋に抗議されて、横須の庄屋と牧谷の庄屋がとりなし詫書をいれで解決したのなど、この道を利用した何よりの証拠だ。

龍野中学第一期生の内海友七氏は入学時にも、帰省にもこの道を利用したことを日記に認めていられる。

大正時代の荒尾銅山の最盛期には岩盤破碎用の火薬を背負つて、山崎から一日はざめにこの峠を越した日平紋治さん。

夏の土用の丑の日には、上ノ上に鎮座の岩上神社への参拝者が、この峠に踵を連ねたものだ。



昔、草鞋ばきで山崎へ行く人はよくこの峠を利用した。岩野

辺などは、塩地峠よりも岩上峠の方が道法が短く、御年貢米を

牛馬の背に積み、出石まで運んだことが古文書でうかがえる。

文政十三（一八三〇）寅年、上の村下組「諸入用帳」に

一銀二十九匁二分

栗小屋峠道刈、白口峠ならびに村内所々道作り貯。

これは栗小屋峠と書いてあるが、千種側の者は岩上峠といつた。



鳥ヶ峠

県道朝来大原線とは、頂上附近で若干位置が異っているが、
岩野辺と斎木を結ぶ標高六百三十メートルの峠。千種から国道
二九号線への最短距離で、鳥取や但馬方面へのレクレーション
の車が多くこれを利用している。

終戦までには、姫路の輪重兵など演習によく峠を雪中行軍して、重い荷物を担いで越したものだ。

生野義挙の主領、澤主水正宣嘉も、高橋甲太郎、田岡俊三郎、森源藏の三人に守られて、上野からこの道を通り、千草の庄屋平瀬戸一郎方に止宿して作州へ落のびている。

峠の頂上に安置されている石地蔵も、道がかわったので、旅する人の顔も見られることはなくなった。



ハカ坂

電燈以前の内海の家では、晩方ランプの用意をしかけた所、石油が無くなっているのに気づき、あわててこの峠を越して斎木へ石油を買いに行き、千草へ出るより利用度が高かつた。

右たかのす
左さいき

の道標も盜難にあつたのかいまは無い。

図中⑥ 墓坂

昔は波賀坂と書かれていたが、いつの頃からか墓坂となつた。

昭和三十八年の鉄砲水で、この坂道は抜所^{ぬけど}が多く、それが放

任されているため、今では全く通行不能の状態である。

岩野辺から斎木へは一番近道で、鳥ヶ峠よりこちらの方が利

用者は多かつた。

嘉永七（一八五四）寅年 岩野辺下組庄屋益太郎の諸入用書
出し帳に、

一、六月二日

斎木行 人足五人 是は安賀村満願寺の弟子

が病気につき、村送りで町から連れて來たので、斎木村まで送つた人足

一、八月二十五日 人足一人

是は大坂御役人町より安賀村へ行かれる墓坂
道案内分。

一、四月十四日 人足一人

安政二（一八五五）卯年 岩野辺村上組庄屋一の坪門藏の「諸
入用書出し帳」に、

是は御代官様が作州へ御通行につき墓坂にて
道案内分。

一、六月七日 斎木行人足四人 又候町より送りつけ斎木へ
継立た人足。

一、六月二日 人足三人 是は右病人安賀村満願寺へ送りつけたところ、送り戻しになり町まで送つた人足。

葦原志挙平命^{あしはらしちくひめい}と天日槍命^{あめのひののじめ}が国占争をして、志挙乎が岩野辺からこの峰に着いた頃、日槍はすでに波賀の国占を終えていたので、おどろきのあまり、志挙乎が「はからざりき」と絶叫したのではかざかと命名されたとの伝承もある。

赤松円心の一族波賀七郎が波賀城に居を構えていた頃、佐用

庄赤松郷の本拠地から千草郷を通つて波賀城へいったので、波賀坂と命名されたとの伝承もある。

この頂上の石地蔵も、現今では往来する旅人もないままさぞ淋しいおもいをしておられることだろう。

また、この坂の頂上に白雲山月光寺という寺があつたそうだが、その跡もわからない。その寺に祀られていた聖觀音菩薩は

岩野辺の石原山福海寺に、藥師如来は斎木の醫王山安養寺に本尊として安置されている。

この安養寺に波賀七郎寄進の半鐘に白雲山月光寺の文字が陰刻されていることから、どこかに寺跡がなければならぬ。

図中⑦ 鍵懸峠

河内から波賀町の原へ越す峠で、いまではほとんど人は通らない。この道と重なつたり分れたりして當林署が林道を敷設したので、全くの廃道である。

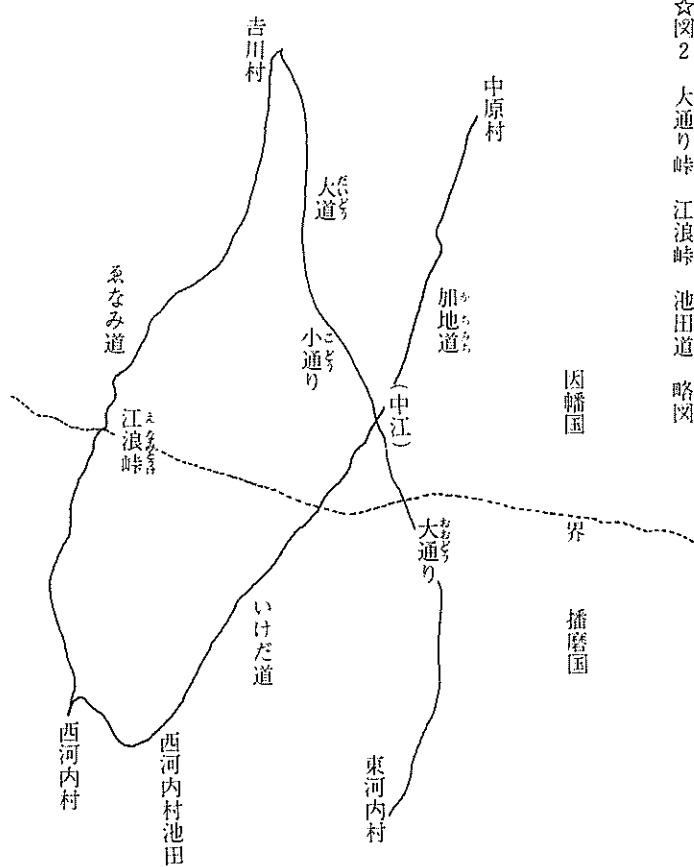
明治初年までは製鉄関係者はよく通つた。鍵懸には鐵山従事者の墓が三百体位はある。

この頂上に温石で刻れた地蔵尊が祀られていたが、盜難にあって、いまは代りの花崗岩のものが鎮座します。

☆図2 大通り峠 江浪峠 池田道 略図



カンカケ峠



図中⑧ 大通峠

河内の三室キャンプ場から北上して、若桜町に通ずる標高千メートルの峠で、この峠にも林道が敷設されて、いまでは自動車で越すことができる。

鳥取県側の中江・加地・中原へ出て国道二九号線に接する。

頂上には中江の善兵衛の妻が寄進した道祖地蔵が苔生している。中江には江戸中期頃は木地屋が住み、鉄山業者が居を構えて、播磨と因幡の中継点の感がした時期もあつた。

頂上近くの下で、谷に沿つて左に折れ、小通峠を越すと吉川へ出る。この道は昔は交通が多くて侍や駕籠も通り、因幡の商品、播州の塩など、牛馬の背によつて繁多に通つたらしい。河内に塩問屋があつたことからもうなづける。

若桜町吉川にある

『吉川と千種の交通について』の記事をみると、

播州往来

数少ない古文書の中でも、最も数多く残つているのは播州往来についてのものである。往来荷物の願上書、宗門改帳にみえる婚姻関係等、播州と吉川村をつなぐこの道は、現在われわれが想像する以上に盛んに往来したと思われる。

この播州往来は、元禄年間（一六八八—一七〇四）以前は主としてつぎのような二つの道によつて播州へ通じている。

A 吉川村——大道——小通峠——池田道——西河内——東河内——千草町

B 吉川村——大道——小通峠——大通峠——東河内——千草町

この道は馬追いがしげしげかよつたようだから、その道なみも、幅もかなりのものであつたと思われる。

年号が記してないので、推察すると文久三（一八六三）亥年かと思われる。

吉川の田中衛敏氏宅の古文書に、

先触
因州役所

覚
亥二月八日出す

一、
繼馬三足

右は江戸表より因州鳥取への荷物が宿継に廻つてきたので各宿々では遅れないよう継立つまむられたい。又左の宿々では公用のため通られるからこれも遅れないよう継立つまむられたい。

因州　田中伝次郎飛脚役所

摂州西宮より飴西迄それより

林田 安志 山崎 千草 河内 吉川 若桜 安井 二月二十一日泊

宿々問屋中

この吉川は千種町との関係が深く、交通も繁く、経済、文化、婚姻等密接なものが多かつた。

吉川村の吉祥寺という禪寺が天明四（一七八四）辰年七月一

一、十一月二十一日

是は石州の座頭吉川村まで手引の人夫。

日全焼している。天明のころは全国的に稀な飢饉が続き、餓死者が多く出て、東北方面では人口が半減したといわれている。

それで再建も見あわせていたが、寛政二（一七九〇）戌年、信徒

らの奮起によつて再建に決し、ちくさ町へも勧化に來てゐる。

その勧化帳の一部に

播州うつのみ村、東河内村、河呂村、舟越村など記され、

一、四十三匁八分 東河内村・藤兵衛

一、大豆一斗三合 舟越村中

などある。

安政五（一八五八）午年、東河内庄村屋彦左衛門の諸事書出し
帳に、

一、四月八日

是は因州八東郡新加地村のもの参り、無心申したるにつき

遣申しました。

一、四月十四日

是は伯州大山宮配札取計ました。

一、四月二十七日

是は九州の武者修業と申す二人連の者因州よりかえりに立
寄り無心申した分。

図中⑨ 池田道

西河内の池田から坂道を登つて、小通峠を越し、吉川へいく
道をいう。ある時期には因州との交通が大通峠よりも多く利用
された。

図中⑩ カナゴ峠

天児屋と中江を結ぶ峠で、鉄砂と書いてカナゴと読む。その
名からして鉄山関係の運搬道らしい。

図中⑪ 江浪峠

元禄十二（一六九九）卯年、製鉄經營者千草屋源右衛門が新設
した標高千九十八メートルの峠道で、天児屋から吉川への要路
である。

明治二十年代に幅六尺に改修されて、因幡の岩井温泉や吉岡
温泉への湯治、出雲大社への参詣に、一畠薬師への祈願によく
この道は利用された。

鳥取歩兵第四十連隊に在隊中の兵隊さんの帰休にもこの道が
選ばれ、鳥取若桜間は汽車で、若桜から歩いたものだ。

この道ができるまでは、因幡との往来は大通峠であったが、この道ができるからは、ほとんどこの道を利用する者のみで、東河内と西河内の馬追い間で争いをおこした次のような例もある。

済状の事

一、因州の商人の荷物が、近年西河内村へ出ますので、東河内村の者共が、この春西河内村に番屋を建て、荷物を差押えました。それで争いになり西河内村から訴状で街道を止めて、商人が難儀をしていますから、滞りなく荷物が通りますようにとお願申しました。

なおまた、九年以前元文五(一七四〇)申年、姫路御役所へ

東河内村と争つて出ました後、河呂村の庄屋助右衛門殿と鷹巣村の庄屋佐五右衛門殿兩人がお仲裁下さつて争いは済みました。その節、両村の馬追いが荷物を半分づつ持ち送ることで結着がついたはずだから、いまの荷物も、西河内村と東河内村の馬追が半分づつ持つようになると、岩野辺村の庄屋才一郎殿が申されました。東河内村は承知せず、迷惑のよう申しましたので両村共に御呼び出しなされ、一々言い分を聞かれました。

東河内村が申しますには、四十三年以前宝永三(一七〇六)

成年、両村で争い、西河内村へ出る荷物は七割を東河内村の馬追に、運ばせる約束のはずにつき、その通り仰せつけ下さい

ますようにと申しましたが、先年たしかな済状があるにもかかわらず、これまで荷物の歩分けを致さず、九年以前に争った時の済状通りにいたさないのは残念でございます。その上、道の真中に番小屋を建て、旅人に迷惑をかけること言語同断、御叱りなさるのが当然と思ひます。

また、西河内村においても荷物を差し押えており、商人衆難儀致しおる様子を才一郎殿申され、双方を呼出し、差し急ぎおる七駄の荷物は早く出すようにと申しつけられましたが、東河内村はこれを聞かず、お互に不届のことをお叱りなされ、御もつともと存じます。それについて各様御仲裁下さいました趣は、左の通りで御ざいます。

一、西河内村へ出る荷物は、いくら出ても六割は東河内村の人馬に持たせ、四割は西河内村の人馬に持たせて千草町着に致します。東河内村の人馬が持ち出した荷物は、千草町の荷宿、米屋源兵衛より駄賃を払うよう御申しつけ下さいませ。

一、東河内村へばかり荷物が出るようになつたならば、西河内村の人馬に四割持たせ、六割は東河内村の人馬に持たせて千草町着に致します。

もつとも両村とも仲良くして、荷物が出たら定めてあるよう、四割六割に分けて不公平のないように致します。

一年中の荷物の数は、千草町荷宿、米屋源兵衛方で調べて間違いないように致します。

若桜より播州千草町迄馬駄賃の覚

ろうか。

一、西河内村へ荷物が出るうち、東河内村へ少々の荷物が出て一駄に付丁銀五匁八分

一、わかさより吉川村迄三里

一、西河内村へ荷物が出るうち、東河内村へ少々の荷物が出ても西河内村は構いません。

右の通り各様この度御仲裁下さいまして、西河内村、東河内村共に得心し、争は済みました。この上は互に荷分けのことは千草町荷宿で立会い、一年中の帳面と引合せ、もし間違はある時は翌年の荷物で差引致します。

後日のため済状に連判致します。

延享五（一七四八）辰年五月朔日

西河内庄村屋 次郎左衛門
東河内庄村屋 伊兵衛

右駄賃取つています。

元禄十二（一六九九）卯年九月

吉川村

一駄とは、

慶長六（一六〇一）丑年に幕府の出した定書によると、「駄賃荷物は四十貫となつていて、これを超えないこと」と書いてある。

江浪新道がつくられたため、あたらしく駄賃を決めたのであ

丁銀とは、

江戸時代の銀貨。計量して使用。目方は三十匁台より四十匁台までで不定。江戸幕府は銀座で鑄造。常是・宝の字や大黒像の刻印があるのが普通。

寛永二(一七〇五)酉年、はじめて江浪道のことが記され、吉川村から播州東河内村および西河内村への交通は、一つの新しい局面を迎えるわけである。

吉川村庄屋、九兵衛の文書は次のとおりである。

願い奉る書上かきあわせの吏

一、当国(因幡)より上方へ出す荷物は先年から、播州東河内村と西河内村へ出ておりました。吉川村より東河内村へは、小通り大通りと言う坂を二つ通り荷物を出しておりました。

西河内村へ参りますには、小通り、池田道を通り荷物を出しております。

一、右のように吉川村より東河内村、西河内村の両村に荷物を出しておりましたが、近年は吉川村奥江浪峠を通り、荷物は西河内村に出すようになりました。これは商人衆から申し出られたのでこの道を通るのでございます。

一、また播州より当国へ参ります諸荷物も、近年西河内村ばかり通りります。

一、東河内村より前々、吉川からの荷物は東河内村ばかりへ出ていたように申し上げたようでございますが、そのような事はございません。古来より両村へ出しておりました。

吉川奥江浪道を通つて荷物を出すことは取きめに違反している。この新道を通つてはならんと申し出でいるようですが、この道は、千草屋源右衛門が吉川奥で炭山を御請けした時以来の道のよう申しますが、当国の御絵図を見ますと、もつと古くからあつた道のよう思われます。

東河内から、そのような訴がでて、今後東河内村へ荷物を出すようにとの仰付けで、そのように致したいと思ひますが、東河内村へ通る坂道は長らく人馬の通りもなく、道筋も見えぬ様になっています。ただいま人夫大勢にて道作り致しますと道の形は出来る様に申しますけれども、大事な荷物を請合い、馬につけて越すことは出来ないと存じます。もつとも無理につけ越しますと荷物がいたみ、荷主衆へ損をおかけ申すわけでございます。

一、御侍様方が御通りなさる際、東河内村へは馬も駕籠かごも通りません。西河内村へばかり御通りなさいます。

一、冬、春、雪道に通いますと、大通り小通りを通るうち、度々吹雪で遭難がございます。八、九年このかた江浪道を通るうち、遭難する者一人もございません。

一、吉川村より古くから通る池田道と江浪道とは、西河内村の家より上にて出合ますので、近年のとうり江浪道を通る様に願います。

この道は坂も一つだけで道もよく往来には重宝に存じます。

宝永二（一七〇五）西年十月二十二日

八東郡吉川村庄屋 九兵衛

大庄屋平兵衛 様

済状の事

一、因州若桜町の商人の荷物を、七、八年以前までは東河内村

へ出しておりましたが、近年道が悪くなり、七、八年このか

た西河内村へ荷物を出すので、東河内村から御訴訟申し上げましたのに對し、西河内村への新道をとめ、先年のとうり東河内村へ出すように仰せつけられ、それについて、御意見の

とうり、大庄屋源右衛門殿より若桜町大庄屋平兵衛殿へ仰せ遣られました。しかし因州の商人共は、東河内村の道は殊の外悪くなり通行出来ず、しかたなく内山七兵衛様御代官支配

の作州へ荷物を出しています。千草組、西河内村、東河内村は申すにおよばず、近村とも駄賃取もなく難儀致していますから、近所八ヶ村の庄屋共仲裁致しましたが、東河内村の者共承知致しませんので争は済みません。それで次のような仲裁案を作り、殿様へ御伺いいたしましたところ、それでよい、その通り庄屋共で必らず解決するようとのお仰せで、双方相談して納得いたし争は済みました。

一、西河内村へ出る荷物は、十駄出たならば七駄は東河内村、三駄は西河内村の人馬につけさせて千草町着に致します。

一、東河内村から西河内村へ二十町あります。荷物つけに空馬で参りますため、駄賃として商人から一分、西河内村から町まで出した西河内村馬の駄賃銀のうち一分、この分東河内村へ遣します。

一、今後、西河内、東河内の百姓共仲良く致し、荷物は相談の上、七分三分に定めます。

一、松平右衛門様御知行所若桜町よりの荷物、吉川村より西河内村へ道のり二里半、この駄賃銀二匁九分。

一、東河内村より千草町まで道のり一里半、この駄賃銀一匁也。

一、商人が飯を食ったときの代銀は、木錢きせんでも旅籠錢はたごせんでも勝手はしたにすること。

一、西河内村より千草町まで道のり一里余、この駄賃銀一匁二分。

一、千草町より塩野村へ道のり三里、この駄賃銀一匁六分。

右の通り西河内村、東河内村庄屋、近村の庄屋相談の上、和解致しましたから、後日においては何も申しません。

右書付の通り公平に致します。

後日のため済状件の如し

宝永三（一七〇六）成年四月 日

一、本多肥後守様御知行所出石村まで千草町より道のり六里二十七町、この駄賃銀三匁五分。

一、出石村より高瀬舟で網干湊あみがんみなとへ荷物を送り、昔より鎌西村へ馬借ばかりということはございません。

出石村より先は商人の勝手に送ります。

一、西河内村、東河内村より千草町へ荷物を送るのに、在で馬を雇いに人夫ひふを遣したときは一回につき駄賃の内から一分取ります。在により便りべんりがあり、その便りに馬雇い頼めば二分を馬子まこが払います。たとへ何足雇いますとも一度に一分づつ取ること。

一、商人より馬を雇いましたならば昼夜に限らず、早速馬を出し遅れないようすること。

東河内村庄屋	次郎右衛門
西河内村庄屋	次郎左衛門
下河野村庄屋	新兵衛
七野村庄屋	久右衛門
黒土村庄屋	利右衛門
室村庄屋	松右衛門
西山村庄屋	伊右衛門
河呂村庄屋	与次兵衛
同断久太夫	
岩野辺村庄屋	平左衛門
同断新右衛門	
千草町庄屋	清右衛門

吉川村の中本勇蔵氏は明治二十七年（一八九四）に出征し、日清戦争に従軍した人だが、この江浪峠を越して、當時山陽本線が御着まで開通していたので、そこまで歩いて御着から汽車に乗り、大阪へ入隊したといわれている。

江浪峠の頂上には、西河内の田中佐太郎建立の石地蔵が、人も通らぬ路傍に佗しく鎮座します。

図中⑫ ミソギ峠

また、津村林蔵氏は姫路の輜重隊に入隊、日露戦争（一九〇五）に従軍第七補助輸卒隊の一員として、満州に転戦、明治三十九年（一九〇六）二月二十六日召集解除となつた。

吉川村では杉の青葉で凱旋門を作り、日の丸の小旗を振つて歓迎準備をしたが、本人はとうとう帰つてこなかつた。津村氏、姫路から山崎、千種を経て江浪峠を越すつもりのところ、大雪で峠を越すことができず西河内の池田熊蔵宅に一泊して、翌日大雪の中を越したと吉川の古老から承つた。

鎌倉期における備前長船の刀鍛冶の原料たる銅は「ちぐさ銅」といつて彼等が愛用した。

千種町で製した火銅が馬の背に積まれてこの峠を越し、吉野川畔の五名から川舟で吉井川に下り長船に運ばれた。

天下の名刀長船の鍛刀はこのミソギ峠を出発点とする。

図中⑬ 上み峠

神変大菩薩こと役の小角の開基といわれる西の大峠、後山行者山への参詣峠。角屋にとまつた東播磨や但州からの参拝者がよく利用した。



江浪石地蔵



上ミ屹

白衣を着て金欄の袈裟を掛け、ときんを頂き、錫杖をついた修験者が法螺貝を吹いて毎年旧の四月八日の山開きとともに列をつくつた。

七野の大橋の袂

右ちくさ、いなば

左さくしう行者道

の道標があるが、大部分の参拝者は千草に宿をとつた。



七野大橋にある道標

山名宗全の大軍が作州から播州へ攻め寄せるとの牒者の報に、赤松円心が旗下に命じて石堂ヶ峰九里尾に城を築き、この上み屹を監視したとの説があるが、この城跡を確認することはできない。

今ではこの上み屹を越す人など皆無といつても過言ではなかろう。

往古の蹤

れた所もある。

旧道には、婆落しとよばれる峻岨な所もあつた。この道も「ちぐさ鋼」を長船へ運ぶ主要道であり、また、吉備文化の導入道

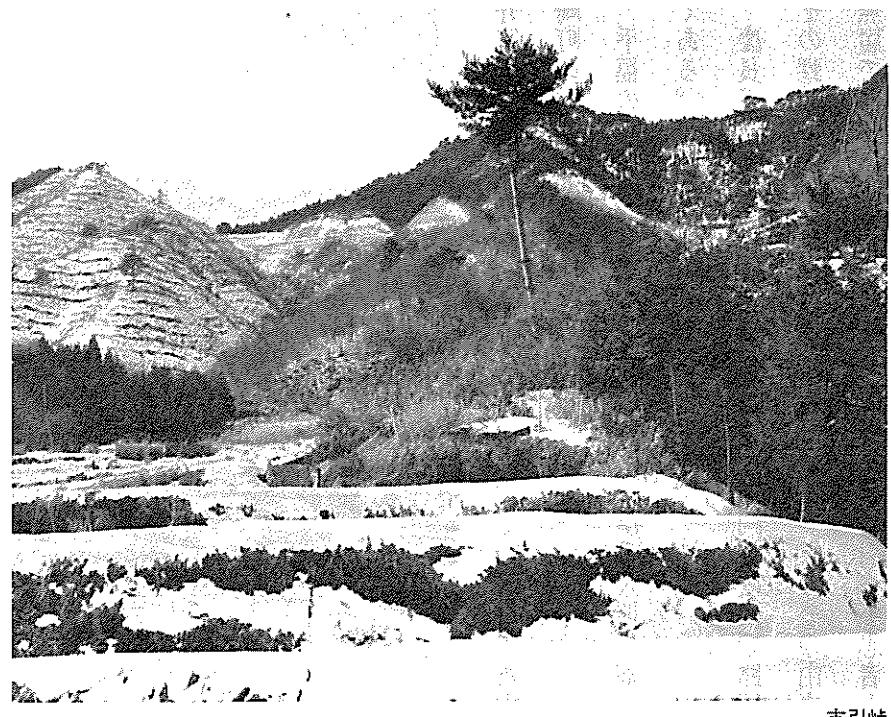
る。

室の離倉から日名倉山南麓の谷道を越すと佐用町の奥海へ出

る。

奥海は明治二十九年（一八九六）までは作州に属していた。
作州に端を発した百姓一揆がこの峠を越して千草に崩雪込み、

図中⑭ 志引峠



志引峠

図中⑮ こだに



道祖の地蔵

西山には堂坂の下に
左ちくさ道
右しそう道
の道標がある。

旧道の頂上近くにあつた道祖の地蔵は、新道脇に移転されて、
誰がたてるのか花が何時でも生々している。

でもあつた。



小谷

これを攻めて亡した。その際由之の息女が家来六人に守られて、このこだにへ落ちてきたが、頂上附近で追手に追いつかれ、家来は防戦の末全員討死、姫は輝政の許へ連行された。

頂上附近に六人塚と刀橋があるが、手向^なけの花もなく、苔むしている。

六分一殿山名宗全は、生野峠や戸倉峠から但州、因州の兵を指揮して播磨へ攻め入るとの報に、上月城にいた赤松円心の武将がこれを防ぐべく、このこだにを越し波賀坂を通つて戸倉に陣した記録も見える。

雛倉には、

右やまみち

左おねみ

の道標が草の中にある。

図中⑯せんごうじ峠

七野から奥海へ通ずる峠。

南光町では千合地と書いているが、発音にあわせて文字を当てはめたこじつけとおもわれる。

井筒屋を襲い、塩地峠を越して青木まで騒ぎたてた古文書が山崎町の庄家にあり、

平福の光明寺には千草町へ作州の一揆千人押し寄せると記し

である。

慶長五(一六〇〇)子年、池田三左衛門輝政が姫路城主の時、

その甥池田由之が平福の利神城主であった。その由之が幕府に無届で城の改築をしたため、徳川家に弓引く不忠者と、輝政は

山嶽仏教のさかんな頃、瑠璃寺の末寺でせんごう寺という寺でもあつて、この名が残つたのではなかろうか、寺跡も不明で

往古の蹤

あり、せんごうじの縁起を知つた者はいないらしい。



センコウジ峠

石像が路傍に立つてゐる。
それでも終戦までは、山崎へいくのに塩地峠や岩上峠を利用する歩行者が多かつた。

因幡へいくには江浪を重宝がり、美作へは志引を、初午の稻荷詣は墓坂を、それは経済と最短距離を願つた本能であつた。

祖父草鞋 親父は下駄で

息子靴 それから後は
跣足なりけり

その祖父は何所へいくにも歩くことを厭わず、坂も峠も草鞋ばきで越した。

それが往古の蹤である。

江戸末期の庄屋の記録を拾つて見ても、奥州の浪人、江戸、京都、紀州、四国、肥後、の武者修業者、伯耆、出雲、近江の配札人、浪速や大和の勧化人、盲人あり、船頭あり、旅芸人あり。

り。

明治二十二年に下河野から船越への道が改修されて、平坦な道ができたため他郷へいくのに坂や峠を越しての苦労は一掃された。

それに郡の中心たる山崎への道はこの道にかわつた。経済も政治も文化も、急速な勢でこの道を通つて千種へもたらされた。なめつわには物資輸送に使つた牛馬の安全を祈る大日如来の

然し、これらの人々に因つて、共に文化の芽も峠を越してもたらされたことには間違ひない。

